

機関番号：12701  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20530456  
 研究課題名（和文） フランス語圏国際共同体と多言語・多文化社会の形成についての研究  
 研究課題名（英文） International Organization of Francophonie and multicultural and cultural society  
 研究代表者 長谷川 秀樹  
 (HASEGAWA HIDEKI)  
 横浜国立大学・教育人間科学部・准教授  
 研究者番号：20322026

## 研究成果の概要（和文）：

フランスおよびフランス語を使用し、あるいはフランス文化を共有するフランス共和国以外の諸国・地域、あるいは世界におけるフランス語話者（フランコフォン）で構成される共同体「フランス語圏」とこれを基盤とする国際組織「フランコフォニー」の成立過程および主要なアクターを分析することにより、フランス語圏およびフランコフォニーの原則は近代以降のフランスにおける政治、経済、社会、文化の根底にある「共和主義」の原則とは異なるものであることを明らかにした。

## 研究成果の概要（英文）：

By analysing formation process and main actors of francophonie, which is a transnational community composed of French Republic, other countries or region where French language is spoken, or francophones in the World, and Francophonie, the International Organisation based on mainly francophone countries, the principles of francophonie (Francophonie included) are different from the “Republican” ones based on politics, economy, society and culture of modern and contemporary France after the Grand Revolution in 1789.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：フランス社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：フランス語圏、フランコフォニー

## 1. 研究開始当初の背景

今日、地域研究の枠組みとして、英語圏やスペイン語圏、ドイツ語圏あるいはアラビア語圏（イスラム世界）、スラブ語圏などのように特定の言語圏についての研究がエリアス

タディの形態で進みつつある。だが、「フランス語圏研究」については、他の言語圏のように体系的な方法論や確立しておらず、業績も断片的である。

まず国内の研究動向から述べると、フランス

文学において「フランス語圏文学研究」と冠する研究が近年見られる。これは従来フランス一国に偏っていた文学研究が他のフランス語圏世界に視点を向けた動向である。当初はケベックなど欧米圏に限られていたが次第にその視点はアンティル諸島やアフリカなど途上国文学にも向けられるようになり、植民地主義（ポストコロニアリズム含む）や多言語・多文化性についても触れられるようになっていく。だが、これらは多言語性、というよりはフランス語やフランス文学の特徴を指摘する方が中心であり、少数民族のフランス語圏間比較的研究ではない。むしろフランス語圏共同体を「フランス植民地主義の再来」とみなし、否定的にとらえる傾向が強く、フランス語圏が少数言語や少数民族に対してどのような政策を講じているのかという視点はない。

また、社会科学観点では、『カナダ外交政策論の研究—トルドー期を中心に』（櫻田大造著 彩流社 1999 年）などのカナダ研究あるいは国際関係論で、カナダ連邦およびケベック州と仏語圏アフリカ諸国とフランス共和国との関係が、今日のフランス語圏を形成するに至る過程を事例分析している部分がある。先の文学研究に比して本研究と方法的に重なる点も多いが、あくまでもこれは 1960 年代末期のカナダ首相トルドー期を限定としたカナダ連邦政府の政策であって、今日のフランス語圏やカナダ以外のアクターについて触れられているわけではなく、また、フランス語圏の問題であるにも関わらず、仏語文献がほとんどない点で不十分であり、「研究動向」とまでは言いがたい。

国外でも文学を中心とする研究と国際関係や外交論からのアプローチに二分できるだろう。このうち文学研究は主に北米（アメリカやカナダ）でしかなくであるが（ルイジアナ

大学フランス語圏研究所が定期的に刊行している研究誌 *Etudes francophones* はその筆頭である)、国内の動向にほぼ同じでありここで改めて繰り返す必要はない。

社会科学分野では、主にフランスで幾つか業績が見られる。フランス国際関係研究所 IFRI の研究誌 *Politique Etrangere* (2001 年 1 月) に Jack Batho と Ingo Kolboom の二名による二編の論文が掲載されている。Batho 論文はフランス語圏とフランス語圏の差異について、Kolboom 論文はドイツ語圏とフランス語圏の外交関係について論じたものである。こうした研究手法は本研究と重なる部分もあるが、いずれも断片的であり、少数民族や多言語社会についての観点は見られない。

それ以外にはフランス語圏国際共同体初代事務総長 (1997~2002 年) をつとめた Boutros Boutros-Ghali の *En attendant la prochaine lune* (Fayard 出版社 2004 年)、および *Emanciper la francophonie* (Harmattan 出版社 2003 年) があり、これらはフランス語圏形成を知る上で極めて重要な文献である。また共同体が刊行している。事務総長報告 *Rapport du secretaire general de la francophonie* (1997-99 年版、1999-2001 年版、補完版) も重要な文献である。特に本研究との関連であるが、フランス語圏における少数民族や多言語社会についての理念や政策について大いに参照となりうる動向と言える。

## 2. 研究の目的

フランス語圏諸国における少数民族（言語・文化）の形成および変容過程、ならびに各国家との統合関係の比較することにより、欧米諸国をはじめ、アフリカや中東諸国などを包括する国際的、あるいはトランスナショナルな共同体「フランス語圏」がどのような背景でどのように形成され、またこの共同体は

少数民族（言語・文化）について具体的にどのような政策を講じているのか、フィールドをこれまでの欧米に加え、アフリカや中東諸国も加え明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究課題の研究方法は1) 具体的なフィールド調査と2) フランコフォニーと呼ばれるフランス語圏国際共同体の設立に重要な役割を果たした人物の思想を文献からサーベイする、という二つからなる。

1) 具体的なフィールド調査は、研究代表者が3年間で、欧州地域（フランス、イギリス領チャンネル諸島）、アフリカ地域（セネガル、マリ）、インド洋地域（マダガスカル、フランス領レユニオン、モーリシャス）、南太平洋地域（ニューカレドニア）において、フランス語と現地語の多言語・文化状況について、「欧州地域語少数言語憲章」に明示されている指標（教育、行政、司法、立法、メディア、文化活動、経済社会活動）を参照しながら明らかにした。またこれに加えて、現地在住者、協力者にベルギー等の調査を依頼し、同様の手法で多言語・多文化状況を調査した。

2) については、「フランコフォニーの父」と呼ばれるセネガル初代大統領のレオポルド・セダール・サンゴールのほか、カナダ（ケベック）の幾つかの人物を対象とした。

1960年代に独立したフランス語圏アフリカ諸国と他のフランス語圏諸国との間で、フランス語圏の形成の動きが直後から見られるようになるが、その実現はカナダ連邦とケベック州との対立により困難を極め、1970年までずれ込む。カトリック布教、教育、医療支援など歴史的にアフリカ諸国との関係が深かったケベック州と外交の連邦政府一元化を強く希求していた当時のトリュドー

首相が激しく反発したためであるが、この対立はフランスやアフリカ諸国を巻き込む外交問題へと発展した。だが、この問題についてはほとんど明らかにされず、結果としてフランス語圏がフランスの主導の下に円滑に進んだという誤った認識をもたらしている。1960年代半ばから1970年までと第1回フランス語圏・サミットが開催される1986年を中心に、この対立の詳細についてカナダの仏語全国紙である *Le devoir* の関連記事から分析する（マイクロフィルムの閲覧・複写）。

またトリュドー首相はフランス語圏・サミット構想をはじめに掲げた人物であるので、彼の政治思想面について日本語・英語・仏語文献から調査し、この対立関係との絡みを明らかにする。

1960年代のフランス語圏運動の中心人物であったセネガルのサンゴールの思想について、フランス語で刊行されている『リベルテ』（全5巻・サンゴールのすべての発言が収められている）を分析することにより明らかにする。特に彼の文化理論の中核である「普遍的なものという文明（*Civilisation de l'universel*）」「共生（*sybiose*）」、そして「ネグリチュード（*négritude*）」ならびに「同化（*assimilation*）」が、今日のフランス語圏の思想である「文化的多様性」や「多文化主義」とどう関わるのかという観点から、現在のフランス語圏と彼の政治思想との共通点、相違点を浮き彫りにする。

### 4. 研究成果

「5. 主な発表論文等」のとおり、7本の学術論文と2本の学会報告を行っている。うち1本は英国で開催された国際学会における英語報告である。

「3. 研究方法」の2)の部分については、研究期間終了後も引き続き取りまとめ作業

にあるため、まだ成果は出ていないが、今後、論文掲載や学会報告の形で公表し、研究書の刊行にこぎつける予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ① 長谷川秀樹、フランコフォニーとフランス文化外交—文化的多様性と矛盾するフランス共和主義、中央大学人文研究所紀要、査読無、第 68 号、2010、pp.445-463
- ② 長谷川秀樹、フランス領ポリネシアとニューカレドニアにおける多言語状況と言語政策の比較研究、社会言語科学会 大会発表論文集、査読有、23 号、2009、pp.36-39
- ③ 長谷川秀樹、コルシカの現代音楽「ポリフォニー」の成立、発展、分化について、CIAS Discussion Paper, 査読無、7 巻、2009、pp.73-81,
- ④ 長谷川秀樹、フランコフォニー国際組織の形成とケベック—1960 年代後半を事例に、ケベック研究、査読有、創刊号、2009、pp.48-61、
- ⑤ 長谷川秀樹、フランス共和国憲法と地域語、多言語社会研究会年報、査読有、2009、pp.5-24,
- ⑥ 長谷川秀樹、エスニック・マイノリティとフランス共和主義—移民とコルシカを事例に、宮崎かすみ著『差異を生きる』(明石書店)、査読無、2009、pp.115-136,
- ⑦ 長谷川秀樹、フランス語圏島嶼比較—自治・民族・言語の観点から、年報島嶼学、査読無、第 10 号、2008、pp.180-187、

[学会発表] (計 2 件)

- ① Hasegawa, Hideki, Contemporary Developments in Corsican Culture and Language, International Conference on Small Island Cultures, 2010 年 6 月 24 日
- ② 長谷川秀樹、フランス領ポリネシアとニ

ューカレドニアにおける多言語状況と言語政策の比較研究、社会言語科学会、2009 年 3 月 29 日、

[その他]

ホームページ等

<http://www1.odn.ne.jp/cah02840>

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷川 秀樹 (HASEGAWA HIDEKI)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：20322026

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：